vol.
17
Mar.2024

市史編さん広報紙

たちかわ物語

TA CHI KA WA MO NO GA TA RI

五日市街道、西砂町　新道（左）と旧道（右）の分岐点（昭和36年（1961）立川市歴史民俗資料館蔵）

令和６年４月から資料編『砂川の民俗』と『写真集』の頒布がはじまります。市民の皆さまのご協力のもと、たくさんの貴重なお話や写真資料を集めることができました。巻末の刊行物紹介では、各資料編の概要と見どころを紹介しています。成果のひとつひとつが、地域の歴史を知る手助けになれば幸いです。

今号の特集では「骨から見える風景 ―資料整理の過程から」と題し、古文書のように文字が記されていない「モノ」資料からは何がわかるのか、資料整理の過程で発見された「骨」を題材に検討します。

「資料をよむ」では、古代・中世部会が調査し、調査報告書の刊行を予定していた「立川流」について、これまでの調査経過と、現時点での結論を報告します。

目次

・新しい市史の編さんによせて …… 2
・第７回関連講演会のご報告 …… 2
・部会短信 …… 3
・特集　骨から見える風景 ―資料整理の過程から …… ４～７
＊連載＊
・資料をよむ「立川流」に関する調査事業報告 …… ８～10
・令和５年10月～令和６年３月活動報告 …… 11
・受贈図書・資料提供者 …… 11
・刊行物紹介 …… 12

新しい市史の編さんによせて

立川市史編さん委員として新たに参加いただいた杉浦早苗さんに、立川市史に寄せる思いをうかがいました。

未来に伝える心　（杉浦　早苗　編さん委員）

30数年前、私は区部から立川市に転居した。その頃の立川市は「東京の田舎」という風情だった。しかし現在の立川市は多摩地区の中核都市。進化を続ける立川市が、これほど総体的な発展を遂げられた要因は何だろう。また、今後さらなる躍進を図る上で重要なことは何であろうか。

目覚ましい立川市の進展の陰には、現在と過去の点を結ぶ数多くの時代が継承されている。市史編さんはそれらの礎を明らかにしていくプロセスだ。

日本一国宝が多く、291を有する東京都。その中の一つが柴崎町の普済寺「六面石幢」である。修理のため令和６年度（予定）までは拝観できないが、身近な国宝の一つだ。地名の柴崎が以前は芝崎と表記されていたなどの変遷や古の生活、慣習などの民俗や文化について調査してあることは人々に理解と愛着を生む。紐解くほどに歴史的遺産を大切にしたいと思う「人の心」を育むだろう。

だから歴史民俗資料館に数多く収蔵された文化遺産は「時代の目撃者」として価値があり、間違いなく後世に伝えることも命題だ。

物ばかりではない。川越道緑地（古民家園）やファーレ立川などに小学校から見学に来る子どもたちが今を生き、市史を紡いでいけるよう先人の知恵を伝承する。

全ての市民がその時代の主人公として、時代の一端を担うことに希望と夢を持ってほしい。市史と共に将来に生きる人々の生活が、安心して未来永劫続くように、古の人々に心を馳せながら取り組んでいきたい。

第７回関連講演会のご報告

令和６年１月21日（日）、第７回目となる市史編さん関連講演会を開催しました。共通テーマを「中世立川の石造物」とし、令和４年度に古代・中世部会が刊行した調査報告書『古代中世の考古・石造物・美術工芸』にまとめた調査成果について講演しました。

第１部　伊藤　宏之氏（立川市史編さん古代・中世部会　編集委員／大正大学文学部准教授）

「立川市域の中世石造物－調査成果の概要－」

伊藤氏からは、立川市内に存在する中世石造物の特徴や傾向を概観するとともに、社会的・宗教的影響を背景に変化してきた石造物のあり方について報告がありました。

第２部　村山　卓氏（立川市史編さん古代・中世部会　特定部会委員／埼玉県埋蔵文化財調査事業団）

「普済寺六面石幢の造立背景－埼玉県の石幢との比較から－」

村山氏からは、立川市の国宝である普済寺六面石幢の詳細な調査成果と、関東やそれ以外の地域における石幢の構造・材質の比較や伝来について報告がありました。

会場となった女性総合センター・アイム１階ホールには、立川市内外から約80名の方が来場され、講演会は盛況のうちに終了しました。

伊藤　宏之氏

村山　卓氏

質疑応答

部会短信（令和５（2023）年度後期）

先史部会

現在、『本編 通史』に向けた調査の準備を中心に、鋭意作業を進めています。『資料編 先史』では、立川市域で出土した主要な考古資料の紹介が中心でしたが、『本編 通史』では、市域の考古資料だけでなく、周辺地域の考古資料も取り上げながら、立川市を含む多摩地域の先史時代史を叙述する予定です。当面は、主に立川市近隣地域を対象に関連調査を行う予定です。また、『本編 通史』の構成や体裁についても、他の自治体史を参考にしながら、読みやすい紙面構成の検討を進めています。

通史編に向けた打ち合わせ

古代・中世部会

石造物や、地名が古文書で確認できる地域の調査を進めています。福生市長徳寺では室町時代に関東地方などで用いられた私年号「福徳」の銘がある板碑を含めた14~15世紀の板碑を数十基調査しました。普済寺六面石幢との関連で、大分県豊後大野市にある暦応２年（1339）に作成された早尾原八面石幢の３Ｄ実測調査も行いました。立川氏と同じ日奉姓の平井明秀が地頭として所領をもっていた蜷川荘内萱津村（福島県会津坂下町）の「中開津」「上開津」集落、埋蔵文化財センター、および平井明秀の寄進状が残る実相寺（同県会津若松市）周辺の実踏・景観撮影等の調査をしました。

長徳寺（福生市）での調査風景

近世部会

『資料編 近世2』の刊行に向けて、砂川地域のお宅を訪問しながら古文書の調査を続けています。中でも砂川村の名主を代々務めた砂川家からは多くの資料が発見され、現在整理を進めています。

その過程で砂川村一番組から四番組までの大幟8枚が発見されました。長さが約12メートルもある立派なもので、江戸の高名な漢学者や書家に依頼した漢詩文が書かれています。大幟が作られた歴史的な背景については今後の検討課題ですが、幕末期の砂川村の経済力や文化を象徴する資料だといえるでしょう。

砂川では他に五番組や十番組の大幟の存在が知られていますが、未発見のものもあります。大幟に限らず、もし資料などにお心当たりがございましたら、ご連絡いただけますと幸いです。

砂川村一番組の大幟２枚
（国営昭和記念公園こもれびの里で撮影）

近代部会

『資料編 近代１』の刊行に向け、掲載する資料を選び、原稿化する作業を行っています。併せて、市史編さん室に寄贈された資料の整理のほか、東京都公文書館や市内旧家の砂川家などでも資料調査を実施しました。さらに立川市歴史民俗資料館に寄贈された文書群の整理に着手し、明治10年代の戸長役場文書などを確認しました。

写真は、上記調査の過程で発見された大型絵図撮影の様子です。一辺５mを超える絵図も含まれていたため、体育館で撮影をしました。

大型絵図撮影の様子

現代部会

『資料編 現代２』の刊行に向けた調査を継続しています。公文書や個人からの寄贈資料の調査・選定や聞き取り調査などを通じて、さまざまな面から立川市の現代のあゆみを分析しています。

また、今年度は米軍横田基地にご協力いただき、基地内の案内とともに、基地で所蔵されている資料についてお話をうかがいました。同じく今年度から着手した米国国立公文書館の調査では、1950年代に米軍が撮影した写真約350点を入手しました。その成果は、市史編さん関連展示で一部紹介したほか、市史刊行物にも活用していきます。こうした米軍資料調査は、今後も継続していく予定です。

立川基地のバスで海に行く子どもたち
（昭和27年、米国国立公文書館所蔵）

民俗・地誌部会

令和５年６～10月に『資料編 砂川の民俗』の調査として、平成30年に実施した自治会アンケートに基づいた聞き書き調査、および、盆踊り・納涼祭の撮影と観察記録調査を行いました。並行して慣行的な自治組織についての民俗調査も行いました。８月には砂川家の外蔵を調査し、共用膳椀を確認しました。秋には阿豆佐味天神社の例祭の記録調査などを行いました。

『砂川の民俗』は、令和６年３月に無事に刊行することができました。写真・資料等をご提供いただいた皆さまに厚く御礼申し上げます。今後は別編の民俗・地誌編へ向け、調査を進めていきます。今後もご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

共用膳椀の調査風景（砂川家外蔵）

骨から見える風景
―資料整理の過程から

楊洲周延《時代かゞみ 文政之頃 鶴御成》部分（城西大学水田美術館蔵）

市史編さん室では、市内に古くからある個人宅（旧家）などを訪問し、現在まで残されてきたさまざまな資料について調査しています。「資料」というと、古文書のような紙に文字が書かれたものを思い浮かべがちですが、なかには紙ではないもの、文字が書かれていないものも多く含まれます。

今回は立川市の旧家のひとつ、中野家から寄贈された資料を整理する過程で発見された骨を取り上げ、資料のもつ価値をさまざまな角度から明らかにします。

中野家文書

中野家は砂川村南砂川（八軒）の旧家です。中野家文書とは、中野家の蔵と母屋に収められてきた資料のまとまり（群）を指します。大正～昭和期における地域の商業や教育に関わる資料などがあり、その数は約１万2,900点にのぼります。資料の点数が非常に多いため、現在でも整理の途上にあります。その中で今回発見されたのが２本の「骨」です。

なぞの２本の「骨」

この２本の骨は包み紙に入っており、発見された当初はなんの骨か、どこから来て、どんな理由で残されたのか、骨の来歴を示す資料は発見されませんでした。

そこで動物考古学の専門家である阿部常樹氏に骨の鑑定を依頼したところ、この正体不明の骨はタンチョウヅルの上腕骨一対であることがわかりました。

偶然に外部から紛れ込んだ可能性は低いと考えられ、現時点では、砂川村の旧家からツル科の骨がでてきたという事実のみが分かっています。

ツル科の骨から見る歴史

明治維新後の明治25年（1892）、「狩猟規則」の公布により、鶴の狩猟は全国的に禁止されました。現在、鶴の主な生息地は北海道や九州・山口の一部に限られており、乱獲や、生息地である湿原の減少により飛来する数が少なくなり、保護の対象となっています。

立川市内の旧家資料からツル科と思われる骨が発見された、これ以上のことは現在分かっていません。次ページでは、鶴が禁猟される前の江戸時代までさかのぼり、鶴が当時の人々にとってどのような存在だったのか、鶴をとりまく環境を見ていきます。

家にねむる資料―諸家文書の調査

市史編さん室では、家に残る資料の調査もしています。地域の歴史を調べる上では、役場からの書類のような公的な資料だけでなく、日記やチラシ、記念写真のような私的な資料の調査も重要です。

江戸時代の鶴と人々

鶴と鷹狩

江戸時代、鶴は江戸をはじめ日本各地に広く生息しており、長寿の象徴や縁起物として、鷹狩における最上級の獲物でした。

鷹狩とは、鷹を使って獲物を取る狩猟のことで、近世の幕藩権力を象徴する儀式でした。そのなかでも徳川将軍家が鶴を捕える鷹狩を、特別な儀式として「鶴御成（つるおなり）」と呼びました。

捕らえられた鶴は塩づめされ、昼夜兼行で京都に送られて朝廷に献上されました。鶴は将軍から諸大名に下賜（かし）されたり、大名も将軍に初物として「初鶴」を献上したりするなど、特別な贈答儀礼品でした。

鶴は、限られた身分の人間にしか捕ることも食べることも許されない、特別な鳥だったのです。

田中訥言「鶴包丁図」
（敦賀市立博物館蔵）

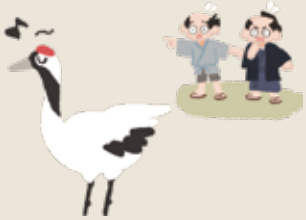
鶴ルール！～鶴を守るための決まりごと～

鶴は、「鷹狩のための特別な獲物」として、多くの決まり事によって「保護」されていました。尾張藩の鷹場に属していた近世立川地域（柴崎村・砂川村）も例外ではありませんでした（詳しくは『たちかわ物語』vol.16）。

☑鶴を驚かせない！

大きな音や振動で鶴を驚かせてはいけない（鷹場では鉄砲の使用や祭礼の開催、家・水車を建てる際には届出が必要であった）

☑鶴を見つけたらすぐ報告！



鶴を見かけたらすぐに陣屋（鷹場の管理所）に報告する。また、捕まえたり、追いかけて逃がしたりしてはいけない

☑鶴に近づかない！

鷹場の範囲は陣屋によって定められているので、鶴に近づかない、境界を示す杭が動いたり壊れたりしないように管理しなくてはならない

エピソード１．鶴飛来！鶴注意！

文久２年（1862）７月に榎戸新田（国分寺市）に鶴（種類は不明）が飛来した時には、村役人たちは村内の人が鶴に近づかずに見守るよう指示を出すとともに、ただちに立川陣屋（柴崎村）に届け出ました。さらに、村役人の一人で、鷹場の管理を担う鷹場預り案内役を務めていた榎戸源蔵は、鶴が近隣へ飛来することに備え、鷹場内の22か村に対して注意喚起を廻状で通達しました。

エピソード２．鶴で通行止め！

柴崎村名主鈴木平九郎が記した「公私日記」の弘化４年（1847）12月21日の記事に、「向島辺より千住辺江かけ鶴　御成ニ而両国通リ通行止ニ付早朝本所江罷越」の記載があります。平九郎が年貢上納のために江戸へ出府した際、鶴御成に伴う「両国通」の通行止に遭遇したことがわかります。

このように、鶴は鷹狩の獲物の中でも特別な存在であり、人々の生活に影響を与える規模で「保護」が徹底されていました。今回思いがけない形でタンチョウヅルの骨が発見され、その背景を調べると、立川の歴史の風景が浮かび上がってきました。文字の無い資料も扱いながら、多面的な調査を進め、今後も地域の歴史を叙述していきます。

参考文献 ■『小平市史　近世編』（2012、小平市）　■『鈴木平九郎　公私日記　第三巻』（2013、立川市教育委員会）　■『武蔵国分寺跡資料館だより』43～45（2020・2021）　■西村慎太郎『宮中のシェフ、鶴をさばく』（2012、吉川弘文館）　■久井貴世「鷹狩をめぐる江戸時代のツルと人との関わり」『鷹・鷹場・環境研究』５（2021）　■山﨑久登「江戸時代多摩川の生態系と鷹場」（2022、公益財団法人東急財団）

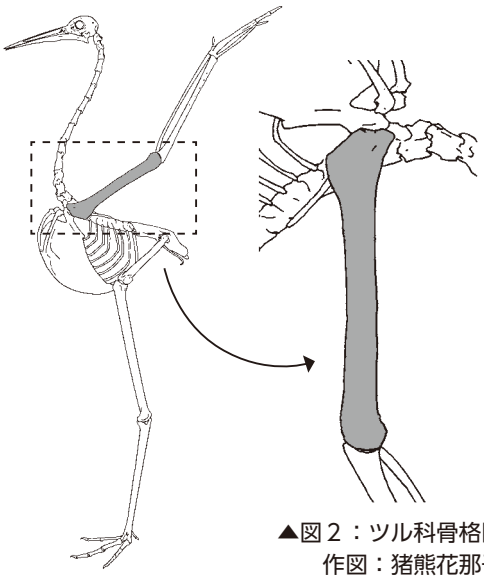
何故、蔵に鶴の骨が？ ―動物考古学から考える―

立正大学文学部非常勤講師
阿部 常樹

▲図１：中野家より発見されたツル科上腕骨

蔵から骨が発見！―何の動物？もしかして…―　中野家での文書調査に際して２点の骨が発見されました。最初、私の方には、「何の骨か見当もつかないのですが、調べてください」と依頼がきました。たまに似たような依頼を警察からもいただくので、そのようなつもりで引き受けました。

結論として、これらの骨は鳥のものでした。部位は共に上腕骨。ではなぜ、鳥と分かったのか。そもそも、我々ヒトも含めた哺乳類と鳥の骨では、質感も形状も大きく異なります。鳥の骨の質感は、空を飛ぶために軽量化しているため薄く、その上で羽ばたいても壊れないように丈夫にするため樹脂のように締まっています。つまり、たとえ骨が破片の状態でも少なくとも鳥か哺乳類かわかるわけです（余談ですが、特に鳥の骨をイヌに与えてはいけないのは噛み割るとその破片がカッターナイフの刃のように鋭利になるためです）。そして、形も大きく異なります。特に、腕や脚の骨の両端の関節の部分の形状が顕著です。例えば、今回発見された上腕骨の肩（肩甲骨）に近い部分（近位端（きんいたん））は、哺乳類は半球状の関節が先端にくっついている形であるのに対して、鳥はやや平べったく、シャモジのような形をしています。



▲図２：ツル科骨格図
作図：猪熊花那子

答えは「鶴」でした。　そんな鳥の骨がどうしてその蔵に大事に納められていたのかを知るためには、さらに、「何の鳥なのか」を調べていく必要があります。その際に、特に先ほど指摘した端部の形状に着目します。同じ鳥でも種類によって少しずつ異なります。具体的に、今度はいろいろな鳥の骨格標本（現生標本）と比較していきます。

その結果、ツル科の上腕骨（左右各１点）であることが分かりました（図１・２）。形状からツル科のなかでの種類を推定するのは、本来、ほぼ不可能ですが、今回の資料はサイズから推測ができました。サイズは共に長さ（全長）275㎜で、比較に用いたタンチョウヅルの現生標本（註１）よりも大きいものでした。日本に飛来するツル科で最も大きいものはタンチョウヅルですので、本種である可能性が高いです。タンチョウヅルは、現在は北海道でしか見かけませんが、明治時代以前は日本全国でみられたとされています（菅沼・柿澤編著2005）。その一方で、当時も希少であったとされています（菅2021）。なお、この骨２点は、左右別な上、サイズがほとんど変わらないことから、同じ一羽のものと考えられます。

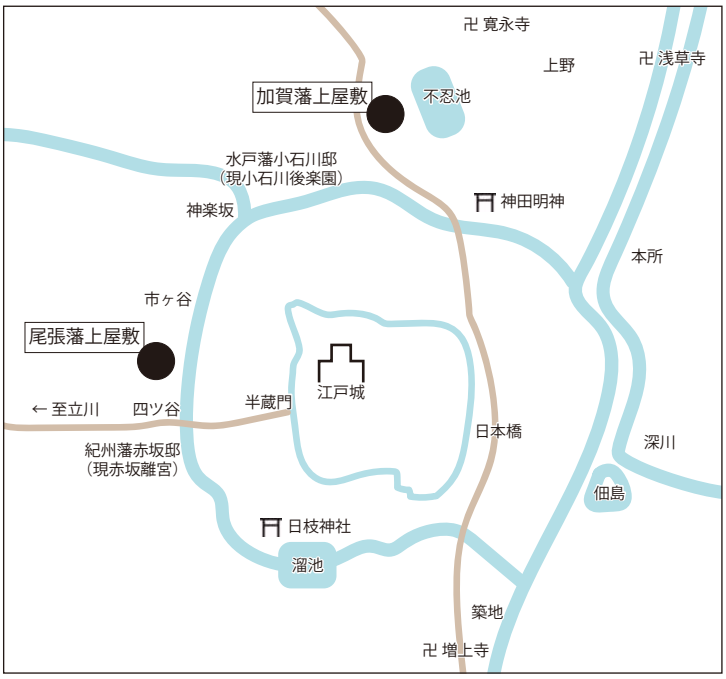
江戸の遺跡での「鶴」　今回、発見されたのは上腕骨のみです。近世の江戸遺跡でも鳥１羽分の全部位がまとまって出土することは珍しく、一部の骨のみである場合がほとんどです。特に、上腕骨も含む四肢の部分（翼部・脚部）の骨が多く出土しています。その背景としては、早めに（売る際？）腐りやすい内臓を含む胴体の部分を切り離して廃棄して、肉の付いている四肢の部分（可食部分）のみにしていたことが考えられます。ツル科の骨は近世江戸遺跡での出土は多くないものの、大名屋敷を中心に出土しています（江田・久井2021）。本資料の見つかった中野家のある砂川村は、かつて尾張藩の鷹場でした。一方で、近世江戸遺跡内の尾張藩に関連する遺跡、特に尾張藩上屋敷（かみやしき）跡（現在、新宿区防衛省）では他の大名屋敷に比べてもツル科の出土が目立ちます。例えば、外様大名で最も石高の高い加賀藩（前田家）の上屋敷跡（文京区東京大学本郷構内）でも、ツル科は２点（橈骨（とうこつ）・大腿骨（だいたいこつ））しか出土していません（表）。これは徳川御三家筆頭であるが故でしょうか。

尾張藩上屋敷跡［新宿区］

部位		左右	数	最小個体数	備考
翼部	肩甲骨	左	1	1	タンチョウより小型
	橈骨	左	1		
	尺骨	左	1		
翼部	烏口骨	左	2	2	マナヅルより小型
		右	2		
	鎖骨	左	2		
		右	2		
	肩甲骨	左	2		
		右	2		
	上腕骨	左	2		
		右	2		
	橈骨	左	2		
		右	2		
	尺骨	左	2		
		右	2		
	中手骨	左	1		
		右	1		
脚部	寛骨		破片		
	大腿骨	左	2		
		右	2		
	脛骨	右	1		
	中足骨	右	1		
	指骨		7		
胴体	椎骨		11		
脚部	脛骨	右	1	1	
脚部	脛骨	左	1	1	

加賀藩上屋敷跡［文京区東京大学本郷構内］

部位		左右	数	最小個体数	備考
翼部	橈骨	左	1	1	マナヅルサイズ
脚部	大腿骨	左	1	1	ナベヅルサイズ



▲尾張藩上屋敷・加賀藩上屋敷の位置（江戸時代）

「鶴」の骨が蔵から出てきた意味　近世において鶴は、一般の人々が獲ることは禁じられていました。そうすると、本資料が近世のものであった場合、獲ることの許されていた尾張藩（藩主）ゆかりのものと推測されます。想像の域は出ませんが、何かしらの理由で、尾張藩から鶴が中野家に下賜され、食した後、記念にその骨を大切に蔵に保存していたのかもしれません。さらには、鶴は長寿や夫婦円満の象徴であったことから縁起物として保存したのかもしれません。

おわりに　今回の事例以外にも、骨をはじめ動物の身体が蔵などで保存されている例はあります。例えば、関東甲信越地域では旧家の蔵にオオカミの頭が大事に納められていることがあります。これらは、三峯神社や武蔵御嶽神社などの「山犬」を神使としている神社の信仰と関係性が深いものとされています。特に幕末にコレラが流行すると、その防疫に大変効果のあるものとしてオオカミの遺骸保有が流行しています。つまり、その骨が何のために蔵に収められていたのかを調べると、その地域の歴史や文化の新しい一面を知ることにもつながります。動物の骨が見つかった際も、是非、興味を持っていただければと思います。

註１　金子浩昌氏所蔵資料。なお、同定にあたって金子浩昌氏からは多大なご指導を賜っている。

参考文献■江田真毅・久井貴世　2021「江戸時代のツル」『江戸動物誌―生活のなかの動物たち―』城西大学水田美術館■菅豊　2021『鷹将軍と鶴の味噌汁　江戸の鳥の美食学』講談社■菅沼浩・柿澤亮三編著　2005『図説　鳥名の由来辞典』柏書房

資料をよむ

「立川流」に関する調査事業報告

古代・中世部会特定部会委員　櫛田良道・近藤祐介

はじめに－「立川流」調査について

「立川流」とは、真言立川流とも呼ばれ、辞書では、真言密教と陰陽道、民間信仰などが習合して出来上がった真言宗の一派と説明されています（『日本大百科全書（ニッポニカ）』「立川流」の項より一部抜粋）。しかしながら、「立川流」は中世段階で「邪教」とされ、聖教（しょうぎょう）などの多くが破棄されたため、その実態は不明な部分が多く、また中世の立川地域（以下では立川市と表記）との関連も諸説が入り乱れています。

このような「立川流」ですが、昭和43年（1968）に刊行された『立川市史　上巻』（以下、旧『立川市史』と表記）には、わずかではありますが「立川流」に言及した部分があり、今回新たに編さんする『立川市史』においてもこの方針を継承することとなりました。

そこで平成28年（2016）10月より、櫛田良道・近藤祐介の２名が、立川市史編さん古代・中世部会の特定部会委員として、「立川流」に関する史料の調査、選定、通史編および資料編執筆などを行うこととなりました。

調査開始からコロナ禍まで

櫛田・近藤の両名は「立川流」研究の専門家という訳ではありませんが、櫛田は近世仏教史、真言宗史という立場から、近藤は中世寺院史、修験道史という立場から、それぞれ「立川流」調査を担当することとなりました。

調査はまず、①これまでの立川流に関する先行研究を参照し、現時点での「立川流」に関する研究の到達点を把握すること、②「立川流」に関する史料にどのようなものがあるのか、刊本として利用できるものか、未翻刻であるならばどこに所蔵されているのか、といった史料の情報を整理することから始めました。

その中で「立川流」に関する研究は、旧『立川市史』刊行当時よりも大きく進んでいることが分かり、立川流の祖とされる仁寛（にんかん）の実像や、仁寛の法流を受け継ぐ「立川流」と「邪教」とされた“立川流的”なものを区別する必要があることなどが明らかになりました。そして「立川流」に関する史料については、諸本の史料翻刻はもとより、史料批判や史料内容の分析に踏み込んだ研究が進展しつつあることなども分かってきました。また、こうした調査を進める途中に開催された部会会議において、「立川流」については資料編とは別に報告書などの形でまとめる提案があり、この件についても合わせて検討することになりました。

そうしたなか、令和２年（2020）３月頃より、新型コロナウイルス感染症の急速な拡大という事態が発生しました。多くの社会的機能がストップし、さまざまな混乱と分断が生じたことは皆さまの記憶にも新しいことかと思います。教育・研究機関も対応を余儀なくされ、大学では卒業式や始業式もないまま、オンライン授業を立ち上げて５月からスタートを切る事態となりました。

都内では数度にわたり緊急事態宣言が発令され、大学や研究機関、寺院への調査も制限・自粛を余儀なくされ、史料調査はもとより論文などの文献調査なども十分に行うことが出来なくなりました。そのため、調査予定を大幅に延期・変更することにしました。

その後、制限も緩和されてきた令和３年３月に調査を再開し、常楽院（東京都板橋区）での史料調査を実施しました。

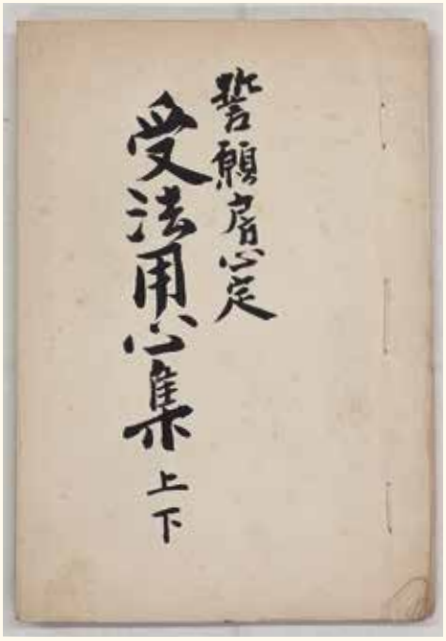
常楽院での調査

常楽院で史料調査を行った理由は、守山聖真氏（1888－1967）の研究が大きく関わっています。常楽院の住職であった守山氏は『立川邪教とその社会的背景の研究』（鹿野苑、昭和40年（1965））という本を執筆しており、これは「立川流」についての先駆的研究として評価されています。そして、この本の中で守山氏は立川流研究史料として『纂元面授』・『受法用心集』・『宝鏡鈔』・『立河聖教目録』・『許可秘伝鈔』・『秘密雑記偽経偽書目録』といった史料を翻刻し掲載されています。そこで、まずは守山氏が収集した史料を検討しようと考え、守山氏の史料が所蔵されている常楽院への調査を実施することにしました。現住職の守山大祐氏のご厚意により、所蔵されている史料の現状調査および写真撮影をすることができました（写真参照）。

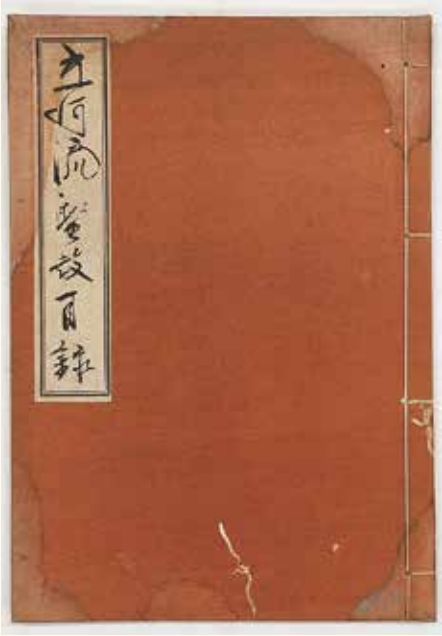
しかしながら、常楽院で撮影した史料の整理や、「立川流」をめぐる最近の研究動向をまとめる中で、「立川流」と立川市との関係について大きな疑念が生じることとなりました。それはすなわち、「立川流」と立川市との間に、明確な関連性を見出せるのかという問題でした。

そこで、文末に「参考文献など」として掲げた論文・書籍、ホームページ情報の成果をもとに、「立川流」と立川市との関連について、少し整理をしてみたいと思います。

▲『纂元面授』（文保２年（1318））



▲『受法用心集』（文永９年（1272））



▲『立河流聖教目録』（文中４年（1375））

「立川流」と立川に関連性はあるのか

「立川流」と立川市との関連について、もっとも有名なのは『宝鏡鈔』という史料の記述かと思われます。『宝鏡鈔』の当該部分には、「醍醐三宝院権僧正弟子〈僧正の舎弟〉に仁寛阿闍梨〈後に蓮念〉と云う人有り、罪科の子細有るに依り、伊豆国に流さる。彼の国において、渡世の為に、具妻の俗人、肉食の汚穢人等に真言を授け、弟子と為す。ここに武蔵国の立川と云う所に陰陽師有り。仁寛に対して真言を習い、学ぶ所の陰陽法を引き入れ、邪正混乱、内外交雑し、立川流と称し、真言の一流を構う。これ邪法の濫觴なり。（中略）その宗義は、男女の陰陽の道を以って、即身成仏の秘術と為す。」という記述があります。これによれば、京都醍醐寺を源とする醍醐流の法流を受け継ぐ仁寛が罪科によって伊豆国に流罪となり、渡世の為に俗人らに真言を授法していたとされます。そし

て、そうした弟子の中に武蔵国立川の陰陽師がおり、仁寛に習った真言と陰陽道を取り込み、立川流と称した真言の一流を起こしたのが、邪法（「立川流」）の始まりで、その教義は男女の交わりをもって即身成仏の秘術とするものである、と述べられています。

この『宝鏡鈔』の記述が根拠となって、立川の陰陽師が密教と陰陽道を習合させ、「立川流」という「邪法」を創始したと言われるようになり、この言説が独り歩きし、巷間に流布していったのではないかと考えられます。

しかし、『宝鏡鈔』の記述にはいくつかの点で問題があることが指摘されています。第一に、『宝鏡鈔』の成立は永和元年・天授元年（1375）であり、仁寛が活動していた11世紀末～12世紀初頭からかなり時代を下った時点で書かれたものであり、その内容の信ぴょう性には疑問が持たれるという点です。第二に、『宝鏡鈔』は「立川流」を批判する立場から書かれたものであるため、その記述にはある種のバイアスがかかっていたであろうことが考えられます。第三に、「立川の陰陽師」なる存在について述べた史料は鎌倉時代には存在しておらず、『宝鏡鈔』の記述を裏付けることはできないという点です。

以上のことから、『宝鏡鈔』の記述は、立川市と「立川流」との関係を示す史料として扱うことは難しいと言わざるを得ません。

それでは、立川市と「立川流」との関係について物語る史料は他にどのようなものがあるのでしょうか。実のところ、「立川流」関係史料とされるものの中でも、実際に史料の中に「立川流」あるいは「立川」といった文言が登場すること自体が稀なようです。

そうしたなかで、櫛田良洪氏が書かれた『真言密教成立過程の研究』（山喜房佛書林、昭和39年（1964））という本の中に関連する記述がありました。それによると、金沢文庫に所蔵されている史料の中に、仁寛の血脈について記した剱阿（称名寺二代住持）直筆とされる史料があり、そこに「武蔵国立川蓮念」という記述があるそうです。ここで登場する蓮念については、他の史料から仁寛の伊豆での別名であると考えられます。しかし、残念ながら流人として伊豆にいた仁寛（蓮念）と立川との関係は、やはりはっきりとしません。

こうした事を踏まえて、「立川流」に関する論文を多く発表されている彌永信美氏は「立川流」という名称の由来について、武蔵国立川の地名だろうと思われるが、必ずしも明確ではない、と述べています。

結論と今後の展望

以上のことを総合して考え、現時点では立川市と「立川流」との関係性について、歴史的な裏付けは判然としない、という結論に至りました。

その後、この結論をもとに令和４年３月に、鎌倉佐保氏（立川市史編さん古代・中世部会長）、市史編さん室事務局、櫛田、近藤でオンライン会議を開き、立川流に関する報告書の刊行は見送ることを決定いたしました。

「立川流」が立川市とあまり関係がない、という結論には残念な方もいらっしゃるかもしれません。しかし、同時代史料からこの点を明確にできたことは、前進であったと考えています。とはいえ、平成28年から始まった調査を、これで終了とするわけにはいきません。通史編への執筆はもちろんのこと、調査成果を市民の皆さまに何らかの形で還元したいと考えております。そこで、事務局とも相談し、私たちが調査の過程で得た「立川流」に関する知見を、今後コラムのような形で随時紹介していく予定です。立川市史編さん事業における「立川流」について、ご理解とご期待をいただければ幸いです。

参考文献など

彌永信美「第六十一回智山教学大会講演　いわゆる「立川流」ならびに髑髏本尊儀礼をめぐって」『智山学報』67輯（2018年）。
櫛田良洪『真言密教成立過程の研究』（山喜房佛書林、1964年）。
柴田賢龍氏のホームページ（https://badra20.jimdofree.com/）。
守山聖真『立川邪教とその社会的背景の研究』（鹿野苑、1965年）。

令和５年10月～令和６年３月活動報告

月	日	活動内容
継続調査		近世部会・近代部会・砂川町個人宅調査
		近代部会・歴史民俗資料館調査
10月	18日	近世部会・近代部会・資料整理班：大型絵図の撮影
	20日	近世部会・若葉町個人宅調査
	20日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	26日	古代中世部会・福島県会津坂下町調査
	27日	古代中世部会・福島県会津坂下町調査
11月	２日	現代部会・聞き取り調査
	６日	砂川村大幟調査
	11日	第２回・近世部会会議
	17日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	27日	古代中世部会・大分県豊後大野市早尾原の石幢調査
	30日	現代部会・聞き取り調査
12月	６日	近世部会・近代部会・資料整理班：大型絵図の撮影
	10日	第３回・近代部会会議
	11日	近世部会・砂川町個人宅調査
	13日	現代部会：横田基地訪問
	15日	市民協働作業（立川の史料を読む会）

月	日	活動内容
12月	15日	先史部会・定例打ち合わせ
	15日	第20回編集委員会議
	18日	第２回・民俗・地誌部会会議
	21日	現代部会・特定部会会議
	26日	第２回・現代部会会議
１月	19日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	21日	令和５年度市史編さん関連講演会
	26日	先史部会・定例打ち合わせ
２月	16日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	29日	近世部会・伊豆の国市郷土資料館調査
３月	１日	近世部会・伊豆の国市郷土資料館調査
	１日～	令和５年度市史編さん関連展示
	５日	第３回・現代部会会議
	12日	現代部会・特定部会会議
	15日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	18日	第21回編集委員会議
	21日	第17回編さん委員会会議
	30日	第３回・近世部会会議

受贈図書・資料提供者一覧（令和５年度）

以下にご芳名を掲載し謝意を表します（敬称略・五十音順）
※資料借用をさせていただいた方のご芳名は除きます。

【個人】寺島正芳、中野章、原島宏美、樋口ちづ子

【機関】印西市立木下交流の杜歴史資料センター、清瀬市企画部市史編さん室、国分寺市教育委員会、狛江市企画財政部市史編さん室、たましん地域文化財団歴史資料室、千葉市立郷土博物館、十津川村歴史民俗資料館、成田市立図書館資料調査係市史編さん担当、延岡市教育委員会、常陸大宮市史編さん委員会、府中市文化スポーツ部ふるさと文化財課市史編さん担当、茂原市立美術館・郷土資料館、横浜市史資料室、有限会社えくてびあん

市史編さん室では、引き続きむかしの写真や古文書などを探しています。心当たりのある方は市史編さん室までお知らせください。

市史編さん広報紙 たちかわ物語 vol.17

令和６年（2024）３月21日発行

発行　立川市
〒190-8666 東京都立川市泉町1156-9
編集　産業文化スポーツ部市史編さん室市史編さん係
〒190-0022 東京都立川市錦町3-5-22 YAZAWA DEUXビル 201
TEL　(042)506-0021／FAX(042)525-1601
E-mail　chiikibunka-t@city.tachikawa.lg.jp
URL　https://www.city.tachikawa.lg.jp/chiikibunka/sisi/hensanshitu/shishi_top.html
印刷　有限会社 立川システム印刷
［市史編さん広報紙に関するご意見・ご感想をお待ちしています］

市史編さんHPはこちらからアクセスできます。

刊行物紹介

令和６年４月から販売予定の新編立川市史資料編について、見どころや解説をご紹介します。

新編立川市史
資料編 砂川の民俗

阿豆佐味天神社

『砂川の民俗』は砂川地区の民俗調査の成果を掲載しています。砂川地区とは、立川市に合併する以前の砂川町の範囲をさします。栄町（南砂川）、若葉町、幸町や西砂町（殿ヶ谷、宮沢、中里）等の地域もそのはじまりは江戸時代の新田開発にありました。本書では、新田開発の地区であった砂川における生業、社会、衣食住、人生儀礼、年中行事、信仰、娯楽・芸能などを取り上げ、たとえば、桑苗生産の様相や金比羅山の移り変わりを明らかにしています。この砂川地区も立川駅や立川飛行場の設置に伴って大きく変貌しました。この本においては、旧来の慣行的自治組織とともに、今日の自治会の活動も描いています。類例は少ないのですが、『柴崎の民俗』と同様、自治会に対するアンケートや聞き書き調査の成果も記載しました。これらの狙いは、高度経済成長期における急激な変化を生き生きと叙述しながら、砂川地区が経験した生活の変化と現在を描くことにあります。本書では、市民の皆さまにご協力をいただき、自身や家族、先代が経験した語り（口述資料）を活用し、また、行事等の観察に基づく写真、図も多く掲載することにつとめています。本書を紐解き、その世界に触れていただきながら、ご活用いただければ幸いです。（中野泰）

Ｂ５判・カラー口絵８ページ・本文約600ページ・上製本・価格2,500円（予定）

新編立川市史
資料編 写真集

平成12年頃（立川市歴史民俗資料館提供）

平成27年（2015）から始まった市史編さん事業で収集している資料には、古文書や公文書などの文字資料だけでなく、多くの写真資料も含まれています。

そこで本書では、市内外の方々から提供いただいた写真146点を中心に、785点を９つのテーマに分けて掲載し、明治時代から現在に至る立川市の街並みの変化や発展の様子、私たちの生活や環境の移り変わりを、分かりやすく描き出すことを目指しました。

それぞれの写真には、撮影した場所や時期などの基礎情報を記載しました。併せて、写真を読み解くための手がかりとして、被写体や撮影状況にまつわる解説も掲載しました。また、大正時代以降の航空写真等を扱った「第１章 立川市を上から見たら」には、撮影の範囲や方向を示した図を付け加えました。市内の街並みの写真を集めた「第５章 市内点描―街角の風景」には、略地図を付けて撮影地点を示しました。

本書が、昔を思い出すきっかけや、立川のあゆみを紐解く手がかりになれば幸いです。

Ａ４判・フルカラー・本文367ページ・上製本・価格4,000円（予定）

既刊好評発売中！ 新編立川市史刊行物は各種好評発売中です。

頒布場所：立川市役所本庁３階市政情報コーナー、立川市歴史民俗資料館、オリオン書房ノルテ店、ジュンク堂書店立川髙島屋店

新編立川市史 資料編

先史	B5判・カラー口絵８ページ・本文602ページ・上製本・価格3,500円
古代・中世	B5判・カラー口絵16ページ・本文604ページ・上製本・価格2,500円
近世1	B5判・カラー口絵16ページ・本文604ページ・上製本・価格2,500円
近代2	B5判・カラー口絵８ページ・本文580ページ・上製本・価格2,500円
現代１	B5判・カラー口絵４ページ・本文579ページ・上製本・価格2,500円
柴崎の民俗 残部僅少	B5判・カラー口絵８ページ・本文535ページ・上製本・価格2,500円
地図・絵図	A4判・フルカラー・190ページ・上製本・DVD付・価格3,000円